

ひな人形ができるまで



ひな人形は、加東市で一貫して作られているわけではありません。代表的なものとして、頭(かしら)は京都府や埼玉県で、ぼんぼりは岐阜県でというように、全国各地にそれぞれの産地があります。加東市では「着付師」と呼ばれる、頭を除く作業分野を担当しています。

西陣などから生地を仕入れる。型紙に合わせて裁断し、着物を作る。稲わらや針金を使って胴体を作る。着付けして、形折りをする。頭を付けると完成です。

鯉のぼりができるまで



布にしわがよらないよう、熱板(捺染台)の上で布を伸ばす。型枠を用いて布を染めあげる。染料が乾いたら、蒸気窯に入れて蒸し、染料を定着させる。この時白地が汚れないよう、オガクズをまぶす。水洗いの後、さらして乾かす。表裏を合わせて裁断する。ミシンで縫製し、口輪を付ける。このような工程で鯉のぼりは完成します。染色作業は熱加工を伴うため、夏場は大変過酷な作業となりますが、この工程を独自に持っていることが、企業の強みにもなるのです。

ひな人形

ひな人形作りのはじまり

加東市を代表する地場産業の一つである節句用品の製造は、元々現在の東条地域において、本来の生業である米作りを補うため、農閑期の季節作業として始められたものです。現在、加東市内で節句用品が作られている旧中東条村の周辺は、山あいの地形のため耕作面積が少なく、農業だけでは十分な収入が得にくかったようです。そのため、農業以外の副業にも力を入れたという事情もあつたのではないかと考えられます。東条地域で、ひな人形の製造が始められた時期についてはあまりはつきりとしていないようです。「中東条村史」によると、明治時代の中頃に、大畑地区と



全国各地の産地との協力で一組のひな飾りが完成します。

土肥友太郎氏と土肥音治郎氏が、京都から職人を招いて人形の製法を習い、製造を始めたのがひな人形作りの始まりであると考えられています。

鯉のぼり

鯉のぼり作りのはじまり

鯉のぼり作りも、ひな人形作りと同様、農閑期の季節作業として始められたものです。昔の鯉のぼりは、今と違って和紙に鯉を1匹ずつ手描きしていました。そのため、誰にでも簡単に作れるものではありませんでした。しかし、当時の東条地域では、男児の節句祝いに用いられていた「幟絵旗(のぼりえぼた)」の製造が行われており、複雑な絵柄を描くことができる職人が数多くおられました。その技術を生かすことができる産業として、鯉のぼり作りが選ばれたのではないかと考えられています。明治30年頃に、幟絵旗職人であった新定地区の藤原一雄氏と



職祖柴崎善之助氏の描いた幟絵旗。この技術が鯉のぼり作りに生かされました。

大畑地区の柴崎善之助氏が、大阪の堺で学んだ製造方法を東条地域に持ち帰りました。そして殖産会を組織して製造を行ったのが、東条地域における鯉のぼり作りの始まりといわれています。

加東市の伝統産業

「ひな人形」と「鯉のぼり」を知る

節句のお祝いに欠かせない「ひな人形」と「鯉のぼり」。どちらも加東市を代表する伝統産業であり、長い歴史の中で多くの人々によって培われてきました。そして、現在もその伝統は受け継がれています。